

アジア太平洋地域における諸問題解決に向けての総合的研究

An interdisciplinary study for solving the problems in the Asia-Pacific region

松村 茂樹¹, 松田 春香¹, 角南 梨央²
Shigeki Matsumura¹, Haruka Matsuda¹, and Rio Sunami²

¹大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科
²大妻女子大学大学院人間文化研究科言語文化学専攻国際文化専修

キーワード : アジア太平洋地域, 諸問題解決, 総合的研究

Key words : Asia-Pacific region, Solving the problems, Interdisciplinary study

1. 研究目的

近年, 東アジアが大きく動いている. その最大の要因は, やはり中国にある. 「世界の工場」そして「世界の市場」として, 経済的成長を果たした中国が, 鄧小平時代の「韜光養晦」を捨て, 大国意識を顕にし始めた. そして, アメリカにアジアのリーダーとしての承認を求め, 二大大国として共に世界をリードしようとの提言まで行った. アメリカはそれを一蹴したと言われているが, アメリカも最大の国債引き受け先である中国に無条件に強く出られるわけではない.

そういった状況の下, アメリカとの関係が強く, 中国とも経済的に深い関係を築いて来た日本や韓国は, 新たな対応を迫られている. また, 台湾及び東南アジア諸国も, 中国との距離の取り方を再考する時期に入っており, 日本との関係をそれに絡めて考えている. ただ, 日本も, 調整役になれず, 本来, 同様の立場として協力すべき韓国とも個別の問題を抱えている.

また, この動きの発端である中国の経済的成長が勢いを失って来ており, その行く末を危ぶむ声も多く出ている. ただ, 中国の経済的成長とは, アメリカのアップルが自社工場を持たず, アイフォンなどの製造を台湾の鴻海に全て委ね, 鴻海(ホンハイ)の事業展開会社である富士康(フォックスコン)が中国で大量生産するという事象に象徴されるような, 下請け的製造業によるものであり, 仮に今回の危機を乗り越えたとしても, その限界は予想されるものであった.

アメリカは, リーマンショックの後, 苦しみながらも自らが生み出したITとビックデータビジネスという, いわば第4次, 第5次産業を軌道に乗せ, この分野の製造はアジアに委ねた. 作るもの

がほぼ変わらない伝統的製造業にはリスクはないが, 日進月歩の分野では, 製造ラインの設備投資が回収できないまま, 新たな製品が提案され, これが大きなリスクとなるからである.

ただ, 中国を含めたアジアは, これに気付かず, 仮に気付いたとしても, あえて目をそらして, 下請けの製造業という限界が見えている分野での経済的成長を謳歌し, 何の対策も立てないまま, 今日に至っている. 今回の中国の経済的失速は, これが原因の全てではないが, これが主因となる失速もいつか訪れよう. この失速が上記のような複雑に絡み合う, 東アジア, 東南アジア, そしてアメリカというアジア太平洋地域における諸問題の解決をより困難にすることは論を俟たない. もちろん, 中国の経済的失速が中国を謙虚にさせ, 「韜光養晦」に戻るといった可能性もなくはなからうが, それよりも, 国民の経済的困窮が中国を不安定にさせ, 過激な世論をより多く生み出し, それに動かされてしまう可能性の方が高いからである.

このように考えると, 実は, アジア太平洋地域における諸問題の解決とは, 外交だけで可能なものではなく, これは近年のAPECがほとんど有効な方策を実行できないことからよくわかって. 本研究では, そのような状況の中, アジア太平洋地域における各国各地域の研究をベースとして, 問題の本質を明らかにした上で, 解決策を提示したい. そして, その解決策は, すでに「太平洋は内海と化し, 太平洋諸国がひとつの地域社会を形成し得る」(「環太平洋連帯の構想」1985. 5)状態になっている今, この地域の国際関係から生まれると思われる.

2. 研究実施内容

研究代表者、共同研究者がそれぞれこの地域における研究を進めると共に、この地域において重要な位置にある台湾台北の台湾大学、中国上海の復旦大学を訪問し、交流検討を行った。

台湾大学は、周知の通り、世界屈指の名門大学で、今回訪ねた文学院語文センターは、中国語文組（中国語学科）を設け、留学生に中国語を教育している。教員は40名以上おり、2015年度は1,098名の留学生が学んでおり、内、日本からの留学生は311名いる。1クラス5～7名という少人数クラスを採用していることが特色で、双方向による実践的な教育が行われている。

また、文化芸術に関する講座や、国際交流の機会も多く設けられており、担当教員の同意があれば、台湾大学の授業も聴講できる。

世界的名門大学で、中国語を学びつつ、世界中から集まった優秀な留学生が交流できる場が設けられていることは、この地域の問題解決に大いなる貢献を成すであろう。

復旦大学は、中国の最先端都市たる上海にある世界的名門大学である。今回、同大学社会発展と公共政策学院を訪ね、中国社会と中国社会学の現状について座談会を行った。改革開放以来、中国の社会は急速に変化しており、社会学研究もそれに伴って、発展的变化を遂げている。中国社会の変化を端的に述べるなら、それは、集団から個への意識の変化である。そして、個としての責任と

義務を果たす人々が共生する時代が到来しており、社会学もその方向性を示していることを、この座談会で確認できたことは大いなる成果であった。

中国の社会がこのような方向性を有していることは、この地域の問題解決に何より大きな希望となるだろう。

3. まとめと今後の課題

この共同研究プロジェクトにより、台北と上海に出張でき、直接交流の機会が持てたことは、大きな成果につながった。上記研究目的に記したように、この地域には解決すべき問題が多々あるが、直接交流により、それぞれが問題意識を共有していることがわかった。それがわかれば、問題解決の方向性が見えてくるし、それに向けて協力することで、真の解決が図れよう。

今後は、その具体的解決法を、共に考えて行きたい。

このような共同研究プロジェクトの機会をお与えくださった人間生活文化研究所に感謝申し上げる次第である。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

[1]松村茂樹 角南梨央 高尾和泉「中国社会と中国社会学の現状」『人間生活文化研究』No.27「資料」